

竹越與三郎の歴史観

—研究ノート—

武田清子

I まえがき

政権の変遷や支配者の系譜に重点がおかれた従来の伝統的史観に代って、幕末から明治初期に支配的となった歴史観は、福沢諭吉の『文明論之概略』(明治8年)や田口卯吉の『日本開化小史』(明治10年～15年にかけて分冊発行)などの啓蒙主義思想による文明開化の文明史論であった。それは、福沢の主張に顕著にみられるように、“権力の偏重”といった封建制のイデオロギー、価値観を批判し、多数人民の心の働きを活潑化し、文明の進歩を人々の働きによって推進することの意義を指し示す史観であった。文明開化の風潮が退化し、明治憲法の制定、教育勅語の渙発などによって象徴される国家主義的傾向が強まってくる明治20年代から30年代にかけて、文明史観の精神を継承したものに、民友社の史論があることは日本史学史の系譜をたどるとき明らかなるところである。山路愛山、徳富蘇峰、竹越與三郎(三叉)らの史論にみられるところの民友社の史論は、「文明史」の嫡流、あるいは、啓蒙史学の血脈をうけつぐ「民間史論」ともよばれる¹⁾。もっとも、蘇峰が日清戦争期を境に、平民主義から大日本膨脹論、皇室中心主義へと思想的立場を変えて行ったことに代表されるところの、“民友社の変貌”は、その史論における上記のような史論の生命の喪失を意味したことはいうまでもない。

しかし、その中であって、竹越與三郎は、一時、民友社の上記のような「民間史論」の重要な形成要因として活動し、特に、新しい史観に立って日本史をとらえ直そうと試みた『新日本史』(明治24年～25年)に代

表されるような史観、明治28年末、民友社と袂別した後の政治・思想活動など、民友社の一員というワケからは大きくはみ出した独自の思想と歴史観に立つ思想家である。本稿においては、この竹越興三郎の歴史観の特質、日本史のとらえ方等に焦点をあわせて考察したいと思う。

先づ、竹越興三郎(三又)、その人と活動について概観しておこう。

彼は、1865(慶応元)年10月5日、埼玉県本庄の清野家に生れ、(後、竹越家の養子となり、越後=新潟県を郷里とする)、1950(昭和25)年1月12日に永眠した。郷里で漢学を学んだが、後、慶応義塾で教育を受け、福沢諭吉の影響を深く受けた。1882(明治15)年には旧姓の清野興三郎でチャンブルンの『米州行政権論』を翻訳、更に、1884(明治17)年には、19才でヴィクトル・カウシンの『近代哲学宗統史総論』、および、ポーズの『独逸哲学英華』を翻訳出版しており、1887(明治20)年には、バジヨットの『英国憲法之真相』(Walter Bagehot: *The English Constitution*)を岡本彦八郎と共訳出版している。バジヨットのイギリス憲政論は、ヴィクトリア朝のイギリスの議院内閣制を論じたものであるが、竹越らの訳文によれば、憲法には二個の性質があるのであって、第一は、「尊厳の部」(“the dignified part”)即ち、人民の敬服を惹き起し、之を保持するものであり、第二は、「実力の部」(“the efficient part”), 即ち、憲法が実際の活動をなすものである。前者は君主や上院などであり、後者は、下院や内閣である。こうしたイギリスの憲法は、中世から遺伝した奇々怪々の集合物から生じたものであるが、このような、第一の、女王や貴族の権威をもって人民の敬服を惹き起し、忠義心や信任を得て彼らを保持し、第二の、下院や内閣は、行政・立法の二権を掌握して、実力をもって議会政治を機能させる。イギリス憲法に内在したこうした二つの部分を再活用することによって、自由主義の議会政治の堅持を追求しようとするのが、バジヨットの憲政論である。

多くの憲法草案が公にされ、憲法論議が盛んであった明治10年代を経て、明治20年となると、伊藤博文、井上毅らによって憲法制定への準備が

着々と進められつつあった時期である。このような時期に、慶応義塾出身の22才の竹越が、バジヨットのこのようなイギリス憲法論を訳出していることは興味深い。それと共に、竹越の人間歴史の見方、その後の彼の思想活動、史論の展開などに、ウォルター・バジヨットの、矛盾にみちた人間とその政治に関するこうした冷厳な、そして、醒めたプラグマティズムを含んだ洞察は、竹越が自覚する以上に、重要なインパクトを与えていたのではないかと考えさせられるのである。

竹越與三郎は1886（明治19）年8月1日、靈南坂教会（当時東京第一基督教会）にて小崎弘道牧師より受洗している⁽³⁾。そして、明治20年には、論文集『政海之新潮』を群馬県高崎の岡本英三郎によって出版。この頃より群馬県におけるキリスト者らの活動、社会改良運動などに接触を持つと共に、東京にて小崎弘道の主宰する『基督教新聞』の編集にあたることとなった。

このようにして、竹越は、クリスチャン・ジャーナリストとしての評論活動に入る。1889（明治22）年、大阪朝日新聞の村山竜平の創刊した『大阪公論』の政論担当記者として招かれ、大阪に赴任した頃、大阪の新聞は、竹越のことを「基督教徒である新進の大阪公論の記者⁽⁴⁾」と報道したといわれる。小崎主宰の『基督教新聞』編集時代より関西方面にもキリスト者の知人が多く、與三郎は同志社出身と誤認されていたともいわれる。更に、竹越は関西で沢山保羅創設の梅花女学校の卒業生で、キリスト教信徒の中村竹代と結婚した。竹代の母、中村静子は、岡山に伝道に来て岡山教会を創設した金森通倫の指導によって入信した熱心なキリスト者であり、金森が開設した山陽女学校の裁縫教師を勤めた人である。このような関係より、與三郎と竹代は、竹代が所属した大阪教会の牧師で梅花女学校長の宮川経輝の司式で婚約し（1889年6月）、同年8月、岡山において、岡山教会の牧師として新に赴任してきた安部磯雄を仲人として結婚している。このように自ら靈南坂教会のメンバーであり、また、以上のような人的諸関係からも明らかであるように、與三郎は、組合教

会系のキリスト者たちと交り、その政治・社会問題への関心の持ち方に共鳴を覚えつつ、文筆活動をつづけたのである。

與三郎が徳富蘇峰の『国民新聞』の論説担当記者として招かれて上京するに到るのも、湯浅治郎（安中教会の中心人物で群馬県会議長、後に新島襄の同志社のために献身したキリスト者、蘇峰の義兄で『国民之友』、『国民新聞』をはじめ、キリスト教系出版社警醒社等の出資者）の推薦によったといわれる。

與三郎の活動の第二期は、1890（明治23）年1月、蘇峰の招きにより『国民新聞』論説者となり、民友社の一員として活潑な言論活動をした時期である。

この期間に彼の代表的な史論が発表されており、代表的著作は、『格朗空』（クロンウエル——明治23.11.7,民友社）、『新日本史』（上巻、明治24.7.3,中巻、明治25.8.4,民友社）、『マコウレー』（明治26.8.22,民友社）、『基督伝記』（明治26.9.7,警醒社、福音社）、『支那論』（明治27.8.27,民友社）等である。明治維新以来、始めて試みられた新しい日本史として『新日本史』が「あまりに有名になり、史家として名声があがるとともに、ジャーナリストとして民友社を代表するかのよう受けとられるようになった。」その前後から時々蘇峰と相容れないものが出来てきたことも一つの要因となり⁵⁾、日清戦争後、1895年（明治28）年には民友社と袂別した。その直後、1896（明治29）年には『二千五百年史』（警醒社）を出版、この本も国民の間に広く読まれ、百数十版を重ねた。また、民友社を退社した後、『世界之日本』（明治29.7.25～明治33.3.2）を刊行した。こうした明治20年代を通して公にされた諸々の著作に彼の歴史観が特徴的に見られる。

竹越の第三期は、民友社を退き、政治活動に深く入りこんで行った時期である。この時期より與三郎はキリスト教から遠ざかり、汎神論的立場に移行したようである⁶⁾。彼の離教の問題は改めて上げたいと思うが、教会から遠ざかりながら、キリスト教より与えられた普遍主義的価値観に

立つヒューマニストとして、歴史を考え、日本の在り方を政治の現実において追求して行った。政治家としての竹越は、陸奥宗光、伊藤博文に近づき、政友会の創設にかけの働きをしたといわれる。また、文部大臣となった西園寺公望の参事官、秘書官としてその働きを助けた。代議士に5回当選、更に、貴族院議員にもなり、後には、宮内省帝室編修局編修官長、枢密顧問官等にも就任したが、太平洋戦争開始前に隠退した。

竹越の歴史観をみてゆく上に、民友社時代が彼の史論の展開の中心になるとはいえ、明治30年代より昭和期にまでわたって興味ある著書も多く、また、彼の活動の足跡がみられるので、明治20年代に限定せず、彼の諸々の著作を横にも、縦にも、ゆきつ戻りつしながら、その歴史観をさぐってみたいと思う。

注

- (1) 家永三郎「啓蒙史学」（『日本歴史講座』第8巻、東大出版会）もその1例。
- (2) バジヨット著、竹越與三郎、岡本彦八郎共訳『英国憲法之真相』（明治20年7月、出版人・群馬県平民 岡本英三郎）。
- (3) 竹越與三郎の受洗につき、飯 清牧師に依頼してしらべていただいた靈南坂教会の記録によると、次のようである。

竹越與三郎（平民戸主）

慶応元年10月5日生

昭和25年1月12日永眠

職業 新聞記者

妻 竹越竹代

受洗 1886年（明治19年）8月1日

東京第一基督教会時代 小崎弘道牧師

原籍簿番号 110号。

- (4) 『竹越竹代の生涯』（昭和40年11月、竹越熊三郎編、発行者・竹越龍五郎）、7頁。
- (5) 柳田泉「民友社文学解説」『明治文学全集』36（筑摩書房）、454～455頁。
- (6) 『竹越竹代の生涯』23～24頁。

II 竹越與三郎の歴史観

先づ、竹越與三郎の歴史の見方、歴史の主題の考え方の特質は何か？
彼は人間とその生活に関心の焦点をおく歴史家である。その点、従来の

『大日本史』や『日本外史』などの国体史観とは明確に異なる歴史学の特色をもつ歴史家であった。それは、彼の次の言葉にも明らかにみられる。

「……愚見によれば、歴史は人類が自然力と戦闘して、理想に達するの跡と見る方、可然と存候。故に歴史の主題は、人物に御座候。人物の発動する舞台に御座候。制度、法律、文学を伝ふるは、是れ唯だ其中の人物が、如何にして育養せられ、如何なる心性を有するかを、見んと欲するがために外ならず候。故に文明史と号して、血もなく、肉もなき理屈の抜殻の如きものを並列するは、小生の取らざる所に御座候。……大なる発明は、理化学的に大なる想像力ある者にあらざれば、能はざるが如く、歴史は大なる直覚力、大なる想像力あるものにあらざれば、修むべからずと存候。」(傍点=引用者)

こうした歴史観でみる時、我国の歴史は、唯だ王朝の陰謀や武士の闘戦のみを主題としているから、その時代の人々がどのようにして生活したかを知ることが出来ないという⁽¹²⁾。従って、彼は、その著書『二千五百年史』(明治29年、警醒社)の第一章第一節を「文明とは人と人との交通の結果にほかならず⁽¹³⁾」をもって始めるのである。そして、また、その序文に、「国民は如何なる生活を為せし乎。如何なる思想を懐きし乎。如何なる本性を示したるか。而していかにして理想に向ってその桎梏を脱せんとしたる乎。是れ歴史家が最大目的として画かざる可からざるもの也。わが国古今幾多の歴史家、能く此目的を遂げしもの果たして幾人かある。」⁽¹⁴⁾といい、源平二氏の争闘や北条、足利の興廢も、マコーレーをもって見させるならば、それは単なる武力の争いに止まらず、一大根本的思想より来たものであることを発見したであろうし、歴史には、日本国民の本性を見出すべき材料が豊かに見出せる筈だというのである。

歴史形成における人間の働きを重視するが故に、竹越は、自然万能説も排するのであり、それは一種の科学的虚偽だという。そして、「人類は物質のために感化せらるるは事実に候へども、物質的勢力が精神的勢力のために変ずるも、また、至大なる歴史的事実に御座候⁽¹⁵⁾」といい、精神の

独立性と精神的力による物質的条件の可変性を強調するのである。

第二に、彼は発展段階説に立って歴史を見ようとする関心を内包している。「コントの流に人類の歴史は創世は神学時代、中世は哲学時代、今世は実験学時代などと分析」することに保留をもちながら、「最も小生の尊重する所を云はんには、独逸のカルリール、モーリッツなども、最も尊重すべしと存候。同人は歴史を分ちて、第一自然の時代、第二信仰の時代、第三理性の時代と申し候。是れ稍我心を得たるもの……」¹⁾といているが、なお、ここにみられる発展段階のとらえ方は社会史の自然律を三段階の原理でとらえたコント的発展段階説のワクを出るものでないことは事実である。ドイツ歴史学派の経済学者たちが、国民経済の発展に関心の眼をむけてとらえた発展段階説、例えば、自然、労働、資本 (W. ロッシャー, Wilhelm G. Roscher), 自然経済, 貨幣経済, 信用経済 (B. ヒルデブランド, B. Hildebrand), 孤立経済, 中間経済, 社会経済 (W. ゾンバルト, Werner Sombart) 等、あるいは、生産力に関心をおいたマルクス主義の発展段階説等と対照する時、竹越の関心は、よりヒューマニスティックであり、国民生活史的である。しかしながら、それは、アジアにおこる歴史の変化を、西洋のそれとは別の、特異な、突然変異的な変化としてみるのではなく、人類の歴史は、西洋をも東洋をも貫いて、普遍的な発展段階をもって展開するものだという歴史観に立っていたことは顕著である。それは、彼の著書、『日本経済史』1—7、(1919 (大正8.11) 東京、日本経済史編纂会、英文では、*The Economic Aspects of the History of the Civilization of Japan*, London, 1930, Allen & Unwin, 3 vols.; New York, Macmillan, 1930) の序文にもみられるところである。

アーノルド・トインビー (Arnold J. Toynbee) が、その著書 *A Study of History—The Inspirations of Historians*, (1954, Oxford University Press) の中で、竹越のこの本の序文の中にみられる“この本の生誕の契機”に触れているのは興味深い。パリにおいて1901年から

1906年（明治34～39年）の時期に日本大使本野子爵が進化学者グスタヴ・ルボン氏と逢った時、ルボンは、日本の近世の興隆を世界の歴史に比類なき驚嘆すべき事象だとし、これは、彗星が燦然として天体に現れたようだ。しかし、彗星は其進路が不規則で、これに接すると危険だ。進化の法則に合わない日本の運命は、彗星の運命と同じで、やがて忽然として地平線の彼方に没入し去る日が来ないかと疑う。——といった。この疑問に対して、本野大使は、日本の興隆は、決して突然に起ったものではなく、今日の日本は二千五百年の長年月を経過し、あらゆる進歩の道程を通り、十分な準備をもって世界史の舞台に現われたのだと答えた。ルボンは、日本の進化の道程を著書にして出版するよう勧めた。帰朝した本野大使がこの話を伝えて、竹越にルボンのみならず、西洋人を啓蒙するために、日本歴史を書くことを勧めた。これが竹越が*The Economic Aspects of the History of the Civilization of Japan* を書いた契機であった。

こうした竹越の序文の一部をトインビーは引用し、このような“対話”に“知的冒険心の種子”（the seed of an intellectual enterprise）が蒔かれていたことを指摘している⁽⁷⁾。私は、“歴史家のインスピレーション”における歴史家トインビーと竹越とのこうした出逢いを興味深く思うものである。

第三に、竹越は、読史法即ち、歴史の読み方について、現在に身を置き、現在の事実の由来を求めて過去にさかのぼるという見方を提案している。

「……愚見によれば、先づ第一に近世史を研究し、然る後、中世史に及び、最後に古代史に達するを以て、便利と存候。是れ常道に反するが如くして、実は然らず。人は身を現在に置き、現在の事実の歴史的由来を知らんと欲して、過去に遡るものなるが故に、最も現在に近き過去より、知らざるべからずと存候。而して近き過去の知了せられたる後、此近き過去の世界が、由て来る所の、遠き過去を知るの要ある訳に候。然

のみならず近世史は、物質人心共に、今日の鑑戒となる事跡、最も多く候。是れ先づ近世史に、着手せざるべからざる理由に御座候。⁶⁸⁾

ここには、歴史とは、現在と過去との対話であり、現在の眼を通して、現在の問題に照らして過去をみるところに成り立つとする E. H. カー (E. H. Carr) や B. クローチェ (Benedetto Croce) らに共通する歴史の見方、歴史へのアプローチをもっていたことがうかがえる。そして、現在の問題をもって、更に、未来にむかっての実践的課題をかかえて、過去に問いかけてゆこうとする姿勢が見られる。

更に、竹越は、歴史は人間のドラマであり、過去・現在・未来という時間的展望だけではなく、高台に立って四方、八方を見遙かすところの空間的展望をも与えるものと考えていた。彼は、その代表的著作の一つである『マコーレー』(明治26年、民友社)において、「イギリス最初の国民史」の著者マコーレーの史観を述べている。その中で、竹越は、マコーレーの歴史は、「小説にして、理論を兼ね、詩歌にして、哲学を兼ね⁶⁹⁾」ているといい、偶然的ドラマ性と理論的科学性^{うた} 詩歌と共に哲学を含むものとして歴史をとらえる一方、次のようにも述べている。「彼の歴史は恰かもパノラマの如し。読者をして中心に立ち、四方を望見するの感あらしむ⁷⁰⁾」と。すなわち、パノラマのように、四方を望見する展望(パースペクティブ)を与えることを「歴史」としてとらえていることが特徴的である。

それでは、マコーレーの「歴史」がどのようにして、そのような時間的、空間的展望(パースペクティブ)を与えるものとなったか? 「彼の歴史は無識なる学者の歴史にはあらず、政治家の識見あり、政治家の経験があ⁷¹⁾るからだという。即ち、マコーレーの史論は、「政治上の智慧」(political wisdom)に富むからだというのである⁷²⁾。このように、歴史の中の政治的、文化的実践的経験が、人間に、歴史をよみ、歴史を洞察する智慧を与えるのであり、また、四方を望見する展望の拠点を与えることを、竹越は、国民史家マコーレー論を通して述べているのである。

第四に、竹越與三郎の歴史観において、恐らく最も重要な点は、歴史

形成、歴史革新の質、および、歴史革新の推進力を何に見るかであったのではないかと考えさせられる。そして、それを最も顕著に示すものは、彼の「クロムウエル伝」（『格朗空』明治23年、民友社）であり、また上にふれた『マコウレー』（明治26年）である。竹越のクロムウエル観を通して、ピュウリタン革命（史）観が『格朗空』には鮮やかに画かれている。

まず、一個の農民紳士にしてピュウリタン革命の指導者となったクロムウエル、および、一大民党となって歴史変革の推進力となった清教徒の発祥の社会的、思想的根拠を次のようにとらえる。

「……当時英国に於ては地方紳士なる一階級あり、彼らは未だ罪惡を犯すほどの暴富にもあらず、去りとて未だ罪惡を犯すほどの貧乏にも陥らず、純然たる一の中層社会にして、勉むれば以て上等社会に上るの望あり、失墜すれば直ちに下層社会に墮つるの憂あるが故に、其の勤勉も、道徳も、自由を望むの心も、当時の社会に冠たるものなりしが、清教徒は実に其の根を此の階級に結び付けたりき、此の種族の中に於ても、ハンチング・ドン一帯の地方は、最も熱心、最も勇敢、最も清潔なる清教徒の根拠にてありき」¹³⁾

そして、クロムウエルはこの地方の空気と家庭教育によって育った。

このハンチング・ドンの代議士として国会に入った無骨漢のクロムウエルは、「沼の公子」と綽名されながら、信仰上の寛容、良心の自由、各宗派の平等の待遇等を求めて、国教と結び、それを機関として反対者を迫害する政府王朝とたたかった。クロムウエルの「鉄騎の発端」を竹越は次のように書いている。

「……其の戦ふも苦むも、皆な上帝の栄光を顕はさんが為めなりと、信じ、其一言一言、皆な良心に責あるの兵卒にあらずんば、共に改革の大業を為す能はざるを看破し、大に力を用ひて同志を糾合し、之を訓練し、之を節制して、以て全隊の軍隊を改造するに至りしなり。此に於てか号命厳明、規律整々相犯さず、相凌かず、其止るや山の如く、其動く

や疾風の如く、其戦ふや猛虎の暴るるが如く、其上帝を恐る、小羊の従順なるが如く、ルウベルト親王が評して鉄騎となせるもの初めて此に生ずるに至れり。⁴⁴」

政治においては、鉄騎が下院の働きをなし、政治クラブ、政社の実をあら見はし、共和主義、主権国会にあり、国会の毎年選挙権の拡張、地方自治、完全なる信仰の自由、政治上の平均権、法典の編纂等、近代の所謂急進論ば、悉く皆な主張せられ、実行された。⁴⁵

更に、反革命の企てあるに及び、遂にチャールス一世を高等法院で裁き、断頭台に上らしめて処刑するに到る。

「チャルス已に死す。其死するや天を仰ぎて祈祷せり、男らしく従容として死せり、此に於てカ cromwell 党を罪する者曰く、此の如きの大王を殺るす者は禍なるかなと。然れども彼れ其の宮人に約束を守るの故を以て、其の人民を欺きたるを恕すべきか。彼れが半夜起つて上帝に祈るの故を以て、其の白昼人民を奴隷にせるを許すべきか。彼が其の酒を少くし、其の肉を薄くせるの故を以て、生民を塗炭に陥らしめしを許すべきか。其死する時に殉教者の如くなるの故を以て、其の二十一年間人民を虐使したるを恕すべきか。 cromwell が彼を殺したるは自家の得失に於ては失策たり、之によりて民心を失し、之によりて生ぬるき党与を失し、之によりて敵党に誹謗の種子を与たり。然れども史家が曾て論じたるが如く、爾来二百五十年、歐洲の政論此に一変し、帝王神権の狂論、此に倒れて、政、政府より出で、責任内閣の実挙り、人民の声、政府の方針となるもの、曾て清教徒の此一挙に因らざるばあらざるなり。⁴⁶」

竹越が、その「 cromwell 伝」を通して追求している歴史の変化＝革新の課題は、信教、良心、思想の自由の確保、選挙権、地方自治、政治上の平等権等の獲得であり、帝王神権説による王政の専制、人民の奴隷化の廃止、平民層による民主政治の実現であり、人民による責任内閣制の確立である。『マコウレー』も、帝王神権説（王権神授説）の排撃を含めて、殆んど同様の歴史変革の課題を追求するイギリス国民史の問題

意識を浮彫りにしている。

これらの著書が、明治憲法の制定、国会の開設、教育勅語の渙発等によって、明治天皇体制のワク組がようやく整ってきた明治23年から26年の時期に出版されていることは注目に値する。民友社の平民主義は、蘇峰によってのみ唱道されたのではなく、竹越の『クロムウエル』や、『マコウレー』は、後述する『新日本史』と共に、自由民権論退潮後の日本社会にあって、蘇峰を凌駕するほどの迫力をもって、人々に感銘を与え、共感を呼ぶものだったのである。

注

- (1) 「歴史学に関して」『三叉書翰』明治36年12月、開拓社、58～59頁。
- (2) 同上、57頁。
- (3) 『二千五百年史』明治29年5月、警醒社、1頁。
- (4) 「二千五百年史に題す」『二千五百年史』1頁。
- (5) 「歴史学に関して」『三叉書翰』57頁。
- (6) 同上、57～58頁。
- (7) Arnold J. Toynbee, *A Study of History*, 1954, Oxford University Press, p. p. 111～112.
- (8) 「説史法に関して」『三叉書翰』60頁。
- (9) 『マコウレー』明治26年8月22日、民友社、184頁。
- (10) 同上、187頁。
- (11) 同上、189頁。
- (12) 同上、55頁。
- (13) 『格朗窓』(クロムウエル)明治23年、民友社、23頁。
- (14) 同上、68頁。
- (15) 同上、119頁。
- (16) 同上、137～138頁。

Ⅲ 竹越與三郎における日本史の視方

竹越与三郎は、その著書『二千五百年史』(1896〈明治29〉年)の序文、「二千五百年史に題す」に彼の日本史(あるいは、特定民族の歴史)へのアプローチを次のように書いている。

「鳩は倭樹短草わじゅたんそうを忘るる能はず、鶴しぎは水沢沼池を忘るる能はず、国民は容易に歴史の外に出る能はず。氣質の偏、積習の力、本性となりて、脱せんと欲するも脱する能はざる桎梏を心に生ずるが為め也。国民は如何なる生活を為せし乎。如何なる思想を懐きし乎。如何なる本性を示したる乎。而して如何にして理想に向つて其桎梏を脱せんとしたる乎。是れ歴史家が最大目的として画かざる可らざるもの也。我国古今幾多の歴史家、能く此目的を遂げしもの果して幾人かある。……若し一個のマコーレーあらしめば、源平二氏の争斗、北条、足利の興廃も武力の争に止まらずして、一大根本的思想より来りしものなるを発見せるならん。若し一個のバックルあらしめば、王朝の衰亡、新民の崛起くつを論ずるに区々順逆をもつてするの外、別に物質的原因を発見せしならん。……¹¹⁾」

ここには、イギリス国民史を書いたマコーレーや、イギリス文明史を書いたバックルなどのアプローチに刺激されて、国民史、国民生活史、日本思想史を試みようとする竹越の問題意識が明らかにかがえるのである。

この小稿において、竹越の『二千五百年史』(1896年)や『日本経済史』(1919年)の展開をくわしく取扱う余裕はないが、彼の日本史の視方、取扱い方、の特色をみるならば、彼は、第一に、日本国民を、ホモジニアスな、閉鎖的、特殊的日本民族としてとらえるのではなくて、人種的にも、文化・文明においても、複数の要素の¹²⁾出逢い、相剋、相互浸透、綜合としてとらえる。「波濤の拍つ所は文明の起る所也。何となれば文明とは人と人との交通の結果に外ならず……¹²⁾」

日本民族を土着民と南方から暖流に乗って九州にたどりついた天照大神、その子孫の神武天皇ら、神武の系統と、蒙古人種の首魁たる大国主ら、シナ大陸の文化による国づくりを旨とした出雲朝廷のシナ文明の系譜等の関係でとらえる。そして、「神武は日本の開祖たるも……神武は一隊の新人種に過ぎず。……国民の多数は半ば裸体の民也¹³⁾」というと共に、「曾つて国祖を送り来りし暖潮は、更らに相続ひて支那の南岸、印度洋、

南洋の新人種を日本の辺境に送りて止まず。」また、朝鮮からも、継続して、「支那大陸の文化を輸入し来る。」⁴⁾という。

竹越の日本民族とその文化の構成要因の考え方には、柳田国男の『海上の道』の発想に共通するものがある。彼の『南国記』(1910〈明治43〉年)にしても、シンガポール、マレーシア、蘭領諸島(インドネシア)、仏領印度支那などの人と生活の観察には、日本民族の源流をさぐる関心が常に伴っている。

ただ、竹越の“南方”を見る眼は、只単に歴史家、あるいは、民俗学者のそれにとどまるものではなく、同時に、政治家の眼も同居していることは顕著である。それは、南方諸地域の天然資源、経済事情、農業と工業の実情、鉄道敷設状況など産業の現状とそれの未来への発展の可能性の測定などを鋭く含んでおり、日本民族の過去を逆上ってその源流をつきとめる関心と共に、未来の「南進政策」への布石の要素も含まれているように思える。それは、『南国記』だけでなく、『台湾統治志』(1905〈明治38〉年)『比較殖民制度』(1906〈明治39〉年)等を貫いてみられるところである⁵⁾。それは、『南国記』に関する多くの書評の中の一つ、『新公論』(明治43.6.1)の次の言葉にもうかがえるところである。「……吾等は此の書に依って、歴史的地理的趣味を多く感じさせられたと言ふよりは、寧ろ邦人将来の発展は北にあらずして、矢張り南へ南へと進まねばならぬと云ふ国家発展策を読ませられる様な心持がした……。」

第二に、日本国民の歴史の展開をみるにあたって、竹越は、大和朝廷、貴族、雄族の働きをも冷厳な眼で追うと共に、そこにおける人間の役割に深い関心の眼をむけていた。彼は、国民生活とその思想・文化にかかわる宗教、社会組織、政治・経済制度等の発展に視点をすえつつ、日本民族の歴史を、把握しようとしている。特に、『日本経済史』においては、田制(土地制度)、奴隷経済と賃銀経済、寺院の土地所有、墾田及び荘園の発達における百姓の経済生活、外国貿易、自由港、自由商業の発生、貨幣制度、税制、武力的封建制度の中の経済的封建制度等々、国民生活の経

濟的基礎、日本の文明史の経済的側面の発展史がたんねんにたどられている。トインビーが、日本の文明史を竹越のこの著書（英訳）によって理解し、彼の「歴史家のインスピレーション」にくみ入れたことは、上述の通りである。

第三に、王政復古としての維新観、新社会の形成、および、そこにおける天皇観を竹越の『新日本史』を中心に見ることとしよう。彼の最も有名な著作であり、マコーレーの『イギリス史』にならった構想といわれるように、人民の自由と民権に関心の焦点をすえた国民史観で書かれた『新日本史』（上巻、明治23年、中巻、明治24年、民友社）が、近代日本において、人民の思想と生活に視点をすえて書かれた“新しい日本史”の最初の試みとして、世の注目をあびた史書であることは今更いうまでもない。上巻は概観であるが、中巻は「社会、思想の変遷」を中心に取り扱っており、近代日本形成の変化の質のとらえ方に彼の史観が生々と展開されていて興味深い。明治20年代の民社の史論として多くの共鳴者を得たのも、この中巻であった。（下巻は準備していたようであるが遂に書かれなかった。）

彼は「維新革命」を、人民を抑圧する暴政に対して人民が立ちあがり、自由の原理や民権の尊重を目ざしてなされた理想主義的の革命とは異り、「社会自身土崩瓦解せんとする乱世的革命にして、転々の際偶然にも、外交のために維新の波際に打上られしもののみ⁶¹」として捉えており、彼は“維新革命”の課題を、むしろ、維新後の近代日本社会が追求してゆくべき未達成の宿題として考えているのである。

また、王政復古の旗印となったと考えられている“勤王”についても、竹越は、そこに歴史変革の要因、ないし、意義を見出すのではなく、民衆の活力の噴出の火口を、結果的に、そして、便宜的に、「皇位」（天皇）に求めただけだと考えている。

「……我皇位たる其初めは天孫の座にして、宗教的の性質を帯び、次は実権を失して貴族のために擁立せられたれば、撰挙王の性質を帯び、

次には政治上には何の権力もなき空名となり、殆んど一家族となれり。然るに今や社会革命の原因は其噴出の火口を皇位に求め、外国に対する国民的自負心のために此に皇位の系図を調査し、日本の国家此にありと叫ばれるや、皇位は忽ち政治的の性質を帯び、大革命の後は、全く宗教的、家族的の性質を脱して、純然たる国家人民の化身せるものとなりしは、實に一大変化と云はざるべからず。即ち、大革命は勤王の爲めに成就せられたるにあらずして、皇位の崇高、威嚴、美麗こそ、却って大革命の爲めに發揮せられたる也。勤皇は大革命の原因にあらず、却って国民の活力たる大革命より流出せる結果なる也⁽⁷⁾。(傍点=引用者)

上述のように、“乱世的革命”が転々しながら、外圧によって偶然に維新の岸に打ち上げられたと竹越のみる維新の大変革を、真の社会変革となし、社会の進歩をもち来らせるためには、数百年の間、抑圧されてきた人心を解放し、人間精神の改造、学問・智識の変革が重要であり、人民に自由と権利を与えることが必要だと竹越はいうのである。彼は、「門地、系統、士農工商、華族、同藩、学派等の人為的階級」に代つて、個人の自主性、平等な自発性に基づく「新社会」、即ち、基督教会、仏教団体、政社、商社、教育会、商法会議所、工談会、農談会、文学会、青年会、婦人会」(“new society”の意と解してよいであろう。)の興ることを重視しており、個人は、これらの「新社会」を通して国家に関わってゆくと見ている⁽⁸⁾。

そして、それと共に、皇位の性質にも更に一大変化をもち来らす必要があるという。皇位は、強者の意見だけでなく、弱者の意見をも代表し、多数者の意見だけでなく、少数者の意見をも代表するものとなることによって、真に超越的、中立的地位を保つものとなる。宗教、思想問題では、神道と仏教のみを「龍車の両輪」とするのではなく、キリスト教、自由思想、更らに、不信仰の立場にも、一視同仁に親臨するものとなることが、憲法第28条(信教の自由条項)の精神だという。皇位が「傾偏の地を去つて、国家、最公、最慧、最清の思想を代表」することによって

社会がそれを尊重するものとなるのであり、「今や皇位の尊敬は、二千五百年來、未だ曾てあらざる所の地に達せり¹⁹⁾」と、明治国家体制において天皇の地位が最高になったことを卒直に述べる。ここにも明らかなように、民主社会へと社会を変革し、進歩させてゆく変化、発展に応じて、それに有用なものへと皇位の性質をも変化させるべきだと考えているのである。ここに彼の進化説で歴史の発展をとらえる観点と共に、皇位を機能的、プラグマティカルに規定する見方が明示されている。そして、宗教的、神話的天皇観は片鱗も見出せないことが注目に値する。

尚、天皇の性格が時代の進化によって変化するという竹越の天皇観は、北一輝の『国体論及び純正社会主義』(明治39年)の中に模倣的に受けとめられ、発展させられているように思える。「……『天皇』といふとも時代の進化によりて其の内容を進化せしめ、萬世の長き間に於て未だ嘗て現天皇の如き意義の天皇なく……¹⁹⁾」もその一例である。また、「歴史とは社会の進化せる跡と云ふことなり¹⁹⁾」という北一輝の歴史観も竹越によって強調されてきた歴史観を踏襲するものとみることが出来るであろう。

こうした竹越の天皇観は、文部大臣、西園寺公望の「新しい教育勅語」案にもつながる。竹越は、西園寺が第三次伊藤内閣の文相に就任(明治31.1.12)すると共に、西園寺の求めにより、その参事官となり、秘書官をも兼ねた。西園寺文相は、日清戦争後、産業が盛んとなり、社会状態が一変、新社会ともいうべき様相を呈してきた日本にあって、国民教育には、上下道德だけでなく、自他共存の道德が必要であり、思想上の鎖国主義を排して世界の活勢と共に推移する思想が必要だとの立場で、新文相としての演説をなし、教育界に衝撃を与えた¹²⁾。西園寺文相は、更に、明治23年渙発の「教育勅語」の書改めを明治天皇に上奏し、「新しい教育勅語」の主旨の起草を命じられた。この時、竹越は、勅語に関する奉答文の準備に参与した。当時、竹越は、世界主義者として保守党より暗殺の教唆をも受けていたので、西園寺は森有礼の例もあるからお互に危険に対して覚悟が必要だと竹越にいったということであり、西園寺は命が

けで準備にあたったようである。¹³

しかし、勅語改訂の動きには、芳川顕正内務大臣（教育勅語渙発時の文部大臣）ら、保守派からの強い反抗があり、病気も一因で、西園寺は文相を辞任した。

不発に終わった、この「まぼろしの新教育勅語」の趣旨は、後に竹越が、西園寺公望の校閲、助言を得て公刊した『人民読本』（明治34年5月、開拓社）に見出せると考えてよいであろう。¹⁴竹越は、また、「公民教育に関して」、その国民教育の理念を『三叉書翰』にも述べている。¹⁵

竹越の『人民読本』の内容に立入る余裕はないが、出版当時、植村正久の主宰した『福音新報』の書評が本書の示す公民教育の理念の特色をよく示していると思えるので、少し長くなるが引用しておこう。

「……吾等は日本に斯かる新著が出版せらるるに至りし機運を喜ぶと共に、此書が営業的書肆の御雇著述家や官辺の腐儒死学者等の手になることなく、自ら人民の味方を以て任ぜらるる竹越氏の如き人の手に成つたのを祝せんと欲す。……此の如き重要な著述は天下第一流の士を俟って始めて成さるべきの事業である。此書は大体に於て先づ上出来と申して差支へがない。『日本国は已に立てり、是より日本人民を作らざるべからず』とは著者が此書を著すの動機であつて、日本の少年少女等への目的である。……従来の教科書の如く無意味なる誇張的文字を聯ねて少年の頭に忠君愛国の箴語を為すが如きの弊は著者の最も避けんとしたる所である様に見受ける。是れ本書が滔々たる世の教科書と其の撰を異にする所であつて、又本書の価値の認識せらるる所であらうと思ふ。

其の天皇と人民との関係を明かにし、愛国を説くと共に偽愛国を戒しめ、忠勇を教ゆると共に戦争の悲惨を示し、国家の態面を重ずると共に、敵国の民を愛すべきを誨へたるなど著者の用意周到なるを見る事が出来る。此書は今日の所、少年少女の読本として最も有効なるものの一つたるを失はない。吾等は之を吾が読者諸君の家庭に推薦することを喜ぶのである。¹⁶（明治38.10、第13版に収録）。

竹越は、天皇制イデオロギーをこえた普遍主義の立場で、近代日本形成の“担い手”の育成に深い関心を持っていたのである。

第四に、竹越は、「日本史は世界史の一部分」という考えを終始堅持していた。その思想は、彼の諸々の著書を通して見られるところであるが、彼の晩年に近い著書『日本の自画像』（昭和14.10.1, 立命館出版部）に明快に示されている。「日本はペリーに戸を叩かれて国を開く前に於てすら、決して全く世界と異なる発達をして来たものではなかった。二千余年の前から、歐洲人の考ふるが如くに思考し、歐洲人が苦悶せるが如くに苦悶し、歐洲人が楽しんだ如くに楽しんで来た。日本人の歴史は歐洲人の歴史と全然懸け離れたものではなく、日本の歴史は世界史の一部分である。日本が世界の強国となったのは、四、五十年間の事業ではなく、歐洲に於ける最も古き歴史ある国民と、同一の過程を経歴しての結果である。¹⁷⁷」（傍点＝引用者）。

ここには、『日本経済史』の序文にみられる趣旨と同様の普遍的な人類発展史観において、世界各国の国民史をみる史観が明らかに表明されている。更に、竹越は、「世界は一つの有機体」だといい、「各国はそれを組織する細胞である。各国の歴史は世界史の一部分である」¹⁷⁸（傍点＝引用者）ともいっている。従って、ヨーロッパのいづれの国民の歴史をみても、日本の歴史をみても、古くは共通に奴隷経済時代をもち、次に土地経済時代、その次に貨幣経済時代へと移行してきたとあって、竹越の理解による経済発展段階説の中に、日本史をも、ヨーロッパ諸国の国民史をも位置づける。¹⁷⁹「四百年前に於て刀剣を支那に輸出した。それが、今日に於て製鉄事業に成功しても不思議はない。三百年前から最良の生糸を作った国民が、今日天下有数の繊維工業国となっても不思議はない。」¹⁸⁰日本の六、七十年の間の近代化は、こうした発展段階を経てきた自然の発達であり、生長なのであって、西洋の模倣ではないというのである。西洋人が日本の近代の発達をみて、歐洲文明の模倣だといい、日本人は日本の文明を放擲して、歐米に屈従したと信じ、優越観を以て、日本、及び、日本人

に臨んだのは、欧米人の日本に対する誤解だと竹越はいう。日本人は、決して自国民の文明を捨てたのではなく、それを堅持しつつ、世界の風潮に順応しようとし、西欧の文明を吸収して我が文明を肥やし、他日、欧米と雁行し、やがて、之を凌駕しようとながっているのだといい、「新日本は模倣に非ず、発達也²¹」という。このように、日本民族の文明の独自性、特殊性と人類の普遍性との結合による日本史の発展を見ようとする視点は明快である。

以上、竹越與三郎の日本史の視方の特徴は、第一に、日本民族の文明の発祥を、土着人、北方の大陸からの帰化人、南方からの漂流民ら複数の要素の相剋、総合、においてとらえ、第二に、日本史を国民生活史、社会組織、政治・経済制度を含んだ文明史の発展段階論的展開においてとらえ、第三に、歴史の変革に自由と民権を獲得した人民の活力、推進力を重視し、維新の旗印となった“勤王”や“皇室”をも人民の活力を推進力とする歴史の発展に有用に機能する性質へと変化すべきだとし、第四に、日本史を、他の諸国民の国民史と同様、世界史の一部分と規定する。そして、諸民族は、その民族文化、文明の特殊性を保持しながら、人類史、世界史としての共通の発展段階を経過して進展し、「世界」という有機体を組織する細胞なのだという世界観を明らかにしている。

近代日本において、土着的であると共に普遍性にむかって開かれた史観をもって日本史をとらえ直そうと試みた竹越與三郎の歴史観は、以上のような諸要素によって構成されているように思えるのである。そして、また、ここには、民権派、保守派の両方を含めて、明治期の思想界に避け難く大きなインパクトを与えた進化論、社会有機体論を、進歩的、発展的歴史観と、人類にむかって開かれた普遍的世界観とに展開させた竹越與三郎の史論が鮮やかにみられるように思えるのである。こうした竹越の歴史観は、平民主義から大日本膨張論へと変貌して行った徳富蘇峰の史観とは、顕著な対照を示すものである。

注

- (1) 「二千五百年史に題す」(序文)『二千五百年史』1～2頁。
- (2) 同上, 1～2頁。
- (3) 同上, 13～47頁。
- (4) 同上, 16頁。
- (5) 『台湾統治志』(明治38年9月, 博文館)の序文「台湾統治志に題す」に竹越の次のような1節が見られる。「未開の国土を拓化して, 文明の徳澤を及ぼすは, 白人が従来久しく其負担なりと信じたる所なりき。今や日本国民は絶東の海表に起ちて, 白人の大任を分たんと欲す。知らず我國民は果して黃人の負担を遂ぐるの幹能ありや否や。台湾統治の成敗は, 此問題を解決するの試金石と云はざるべからず。……」(1頁)
日清戦争勃発直後に民友社より出版された『支那論』(明治27. 8. 27)もこの系列に入る著書である。「……東洋の田舎国たる日本をして, 大陸と接近して大運動を為さしめずんば已まざるに至ると共に, 経済人口等の活力は, 日本をして外に向って『大なる日本』を立てずんば已む能はざらしむるの形勢……。」(3～4頁)。
- (6) 『新日本史』中巻, (明治25年, 民友社), 『明治文学全集』77(筑摩書房) 139頁。
- (7) 同上, 141頁。
- (8) 同上, 161頁。
- (9) 同上, 142頁。
- (10) 北一輝『国体論及び純正社会主義』(明治39年5月, 自費出版), 『北一輝著作集』第一巻(みすず書房), 361頁。
- (11) 同上, 344頁。
- (12) 『陶庵公—西園寺公望伝—』(昭和5年2月, 叢文閣), 142～143頁。
- (13) 同上, 161頁。
- (14) 「人民読本題言」『人民読本』(明治34年5月, 開拓社) 2頁。
- (15) 「公民教育に関して」『三叉書翰』50～55頁。
- (16) 『福音新報』の書評を『人民読本』第13版(明治38年10月刊)に収録。
- (17) 『日本の自画像』(昭和14年10月, 立命館出版部) 4頁。
- (18) 同上, 24頁。

なお, こうした観点は、『世界之日本』(明治29.7.25～明治33.3.2)第一号の社説にも明らかである。「日本は絶対に一国にあらず, 共存共制の大法に繋がれ世界を組織する列国の一にして, 東京湾の水は直ちに金門港の水と相潮汐するが如く, 列国の思想生活互に相触着し, 相感動するを知らば……『日本人の日本』なる思想にして己に固陋, 狭隘……『東洋の日本』と云ふも, また五十歩を以て百歩を笑ふの類なるを知る可し。『日本人の日本』より進んで……世界の日本を自覚し, 世界的見地より経綸を案出し, 世界的胸宇を以て列国の間に周旋せざる可らず。」(『世界之日本』第1号〈明治29年7月25日〉1～2頁。)

80 特集歴史学

- (19) 『日本の自画像』 4～8頁。
- (20) 同上, 38～39頁。
- (21) 同上, 37頁。

付記

(「竹越三又著書目録」「竹越竹代の生涯」, などをお送り下さった竹越熊三郎氏に感謝する。)

TAKEKOSHI YOSABURŌ'S INTERPRETATION OF HISTORY

《Summary》

Kiyoko Takeda Cho

From the end of the Tokugawa Period to the early part of the Meiji Period the traditional interpretation of history which placed emphasis on the scramble for political power or on the genealogy of ruling families lost its effect. The new interpretation of history took the progress of civilization seriously. Fukuzawa Yukichi's *An Outline of the Theory of Civilization* (1879) and Taguchi Ukichi's *A Short History of Civilization* (1877 – 82) were the representative works of this trend. However this enlightenment trend soon ebbed under the impact of the nationalism based upon the newly established imperial nation governed by the *hanbatsu* oligarchs.

Takekoshi Yosaburō (1865 – 1950), an active Christian journalist during the 20s and 30s of the Meiji Period, was once a member of the *Minyū-sha* with Tokutomi Sohō, Yamaji Aizan and others. As one of the popular historians of that period he succeeded the spirit of the Japanese enlightenment and developed it further. After Tokutomi Sohō dramatically changed from a democratic position to one of imperialism and expansionism, Takekoshi separated himself from Tokutomi Sohō and went on writing many books on history.

In this article I have dealt with the significant characteristics of Takekoshi's interpretation of history, particularly of Japanese history. *A New History of Japan* (1891 – 92) and *The History of Two Thousand and Five Hundred Years* (1896) were best sellers and their interpretation of Japanese history made a great impact on the Japanese people. These books were regarded as the first attempt to interpret Japanese history as a history of the common people focusing on their daily life, thought and behavior. At the time when Social Darwinism was utilized by reactionary

nationalists such as Katō Hiroyuki to provide a theoretical basis for the organizational unity of the nation, Takekoshi developed a historical theory of progressive stages of economic and political systems with an emphasis on the propulsive energy of an awakened people for historical change and development. *Oliver Cromwell* (1890) and *Thomas B. Macaulay* (1893) were other popular books written by Takekoshi. These books introduced the spiritual force of the people as the basic factor for democratization in England and the significance of a "history of the people."

He grasped the characteristics of the Japanese people not as an exclusive, single race, but interpreted them as a synthetic integration of racially and culturally plural origins. He believed that civilization would start at the meeting point of different cultures and peoples. He interpreted the Meiji Restoration not as an attempt to restore the imperial rule, but as an explosion of the energy of the people for liberation, which found the emperor as a useful mean for the historical change. He even argued that for further democratization the nature of the emperor should be transformed for such purpose. Kita Ikki obviously succeeded Takekoshi's interpretation of Japanese history. Takekoshi refused to interpret, as some westerners did, the modern, rapid development of Japan as a mutational change. He interpreted the modern development of Japan as the natural result of the universally common historical progress which went through various stages just as in the cases of the history of the West or of other parts of the world. In other words, he interpreted Japanese history from a universalistic view point. The motive of Takekoshi's *The Economic Aspects of the History of Civilization of Japan* (1919; English translation 1930) impressed Arnold J. Toynbee as "the seed of an intellectual enterprise" (Toynbee's *A Study of History—the Inspirations of Historians*, 1954). In the total system of his interpretation of history, Takekoshi viewed Japanese history as an integral part of world history.